

教 職 研 究 科 科 目 概 要		
科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
共通基本科目	第1領域 教育課程の編成・実施	<p>カリキュラムデザインの理論と方法</p> <p>本授業では、学校のカリキュラム全体を見通す視野を獲得するために、まず、学習指導要領の基本構造やカリキュラム編成の基本原則及びその手続きについて解説する。次に各教科の単元計画を構想する。単元目標を達成するために各授業をどのように関連させて単元を構想するのかを学ぶ。さらに、先進的なカリキュラムを開発・実施している学校へのフィールドワークを実施し、その結果を踏まえ、「キャリア教育」「国際理解教育」「伝統文化」「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」などの総合的な学習の時間を核としたカリキュラム開発をいかに進め、いかにマネジメントしていくのか、多角的に事例研究を行う。これらの知見を活かし、カリキュラム開発の基本的な力量を形成する。現職教員院生については、勤務地域の実態や勤務校での実践に基づき、より改善された総合的な学習の時間を核としたカリキュラムを開発し、マネジメントしていくための力量の獲得を目指す。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、フィールドワークを主に担当するとともに、講義全般にわたり実務経験者の立場から適宜コメントを行なう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領の基本構造やカリキュラム編成の基本原則を理解する。 ・学校教育全体の中でカリキュラムを考える視野を獲得する。 ・各教科の単元を構成し、授業を効果的に位置づけることができる。 ・新しい学校教育内容領域の基本的な考え方やカリキュラム開発上の課題を理解する。 ・学校の実態に応じた特色あるカリキュラムを開発し、適切にマネジメントしていくための基本的な力量を獲得する。 ・現職教員院生は、勤務地域の実態や勤務校での実践に基づき、カリキュラムマネジメントの視点を加味しながら、より改善された「総合的な学習の時間」を核としたカリキュラムを開発することができる。
	第2領域 教科等の実践的な指導方法	<p>授業デザインの方法</p> <p>授業は単に教育技術的な観点からのみデザインされるものではない。教育工学的なインストラクショナルデザイン、全ての児童生徒が授業に主体的、協働的に参加できる授業づくり、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業デザインなど、広狭さまざまなデザインが含まれるほか、教師としての「在り方」も授業を実践する際には大きく影響する。今後はこれらの視点に基づきながら、児童生徒の思考力の育成を狙った授業を開発していく必要がある。</p> <p>本授業は、上記の視点を踏まえ、教師が主体的に授業をデザインしていける力量の形成をねらう。その際、免許取得教科にとらわれることなく、多様な教科、総合的な学習の時間、特別活動、道徳の時間、また今日的で教科横断的な教育課題についても取り上げる。また授業をはじめとする教育実践におけるICTを含む教材の効果的な活用についても配慮しつつ、それぞれにおける授業デザインのあり方を探求することを通して、教師に求められる幅広い見識を培う。さらに、授業分析の手法を知ることによって、効果的な授業検証ができるようにする。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、模擬授業を主に担当し、実務経験者の立場からコメントする。</p>

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
第2領域 教科等の実践的な指導方法 共通基本科目	授業デザインの理論と方法	<ul style="list-style-type: none"> ・授業デザインについての基本的な構造を理解する。 ・魅力的な授業をデザインすることができる。 ・授業分析の手法を知り、他者の授業を効果的に分析することを通じて、自らの実践力量を向上することができる。 ・現職教員院生は、自らの実践を振り返り、自身の授業をベースとしながら新しい授業デザインすることができる。
	教育方法・学習科学の理論と実践	<p>本授業では、児童生徒の学びの側から、教育方法と学習の理論について考え、それらを学校現場での実践に結びつけて検討する。はじめに、学習をどのようにとらえるかに関する諸理論を検討する。次に、授業における児童生徒の行動や認知について、発達段階を考慮しつつ事例をもとに考え、さらにコミュニティの中での学びの意義を考える。また学校でのフィールドワークを経て、自律し仲間とともに学べる学習者に育てる教育方法、学習活動において困難のある児童生徒への支援策について具体的に考える。現職教員院生については、これまでの授業実践経験を意義づけまた省察する機会としたい。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、フィールドワークを主に担当するとともに、講義全般にわたり実務経験者の立場から適宜コメントを行なう。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・学びのメカニズムについて、本授業で言及された諸理論に基づき、具体例をあげて説明できる。 ・学校で生じる教育方法・学習上の諸問題について、その援助策を提案できる。 ・現職教員院生は、これまでの教授活動の経験について、本授業で言及される諸理論により意義づけや省察ができる。
第3領域 生徒指導、教育相談	臨床教育の理論と方法	<p>本授業では、初めに教育現場に立脚した臨床教育の展開について、臨床教育学創生の背景と理論について理解を深めていく。次に、いじめ、不登校、児童虐待など、実際に教育現場で起きている様々な課題に対して、社会、学校、家庭、個人の視点から総合的に捉え直し、その解決に向けた実践のあり方について検討していく。具体的な実践の方法として、ケース・カンファレンス、専門機関との連携など、学校内外に開かれた支援ネットワークの形成を通してアプローチについて、事例研究とフィールドワークを通して検討し、児童生徒の理解と課題解決に向けた実践力を高めていく。現職教員院生は、これまでの実務経験を振り返り、自らの実践力のさらなる高度化を目指す。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、フィールドワークを主に担当するとともに、講義全般にわたり実務経験者の立場から適宜コメントを行なう。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床教育学創生の社会的、教育的背景と理論の展開について理解を深めることができる。 ・臨床教育の実践的課題の背景について、社会、学校、家庭、個人の視点から、フィールドワーク等を通して、理解を深めることができる。 ・いじめ、不登校、児童虐待等の実践的課題に対する取り組みについて、ケース・カンファレンス等を通して、児童生徒理解を深めながら、実践を展開していくための理論を理解し、実践力を高めることができる。 ・現職教員院生は、これまでの実務経験を振り返り、自らの実践力のさらなる高度化を目指す。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
第3領域 生徒指導、 教育相談 共通基本科目	生徒指導・教育相談実践演習	<p>児童生徒に受け止められている「生徒指導」という概念と、本来教師が行うべき「生徒指導」とは「ズレ」が生じている場合が少なくない。本演習では、この「ズレ」に着目して「生徒指導」の問題を明らかにしつつ、本来あるべき生徒指導観の獲得を目指す。また、児童生徒によっては受容的な支援が必要な場合も多く、総合的な教育相談に関する実践力を獲得することも重要である。本演習では、この両者を融合・統一した実践力の獲得を目指し、フィールドワークや少人数グループによるディスカッションなど実践的な学習を進める。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、フィールドワークを主に担当するとともに、講義全般にわたり実務経験者の立場から適宜コメントを行なう。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・「生徒指導」、「教育相談」の理論と方法を理解し、さまざまな指導の場面での有効な指導の方法を挙げることができる。 ・「生徒指導」と「教育相談」の関連性と連携を実践的に理解し、さまざまな場面での「チーム支援」を組織する方法を挙げることができる。 ・児童生徒理解の理論と実践的な方法を習得する。 ・現職教員院生は、生徒指導・教育相談で重要となる「語る力」、「聴く力」などの実践力を獲得する。 ・現職教員院生は、チームを組織・運営するための総合的な実践力を獲得する。
	学校マネジメントの理論と実践	<p>学校マネジメントが、教育基本法や学校教育法に明示された教育の目的・目標、学校教育の目的・目標を達成するために、限られた経営・教育資源をいかに掘り起こし、活用し、結合させていくのかについての理論と実践であることを、各種の文献や学校現場での実践を通して学ぶことを重視する。学部新卒院生は、学校での勤務経験がないため、主に文献研究により特定の学校における学校マネジメントによる学校改善の事例分析を行う。現職教員院生は、自己の勤務校でのマネジメント計画を立案し、学校改善の事例分析を行う。授業方法は、講義と受講生の発表・協議を併用する。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、実務経験者の立場から解説を行なう。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・教育基本法や学校教育法に明示された教育の目的・目標、学校教育の目的・目標を理解する。 ・学校マネジメントの理論学習と実践の意義とその重要性について理解する。 ・学校マネジメントを行なうために、限られた経営・教育資源をいかに掘り起こし、活用し、結合させていくのかについて理解する。 ・各種の学校マネジメントの文献研究により自己の学校マネジメント理論を立論できる。 ・現職教員院生は、学校マネジメント理論を勤務校においてどのように活用し学校改善を図るのかを立案できる。 ・現職教員院生は、可能であれば自ら立案した学校マネジメント案の一部を実践し、理論との往還を図ることによりマネジメント理論を身体化することができる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
共通基本科目 第4領域 学級経営、 学校経営	特色ある学校づくりの実際と課題	<p>公立学校（とくに小中学校）における特色とは何か考察したうえで、それが就学校指定を前提としている限り（学校選択制を導入しない限り）、特色化には制約があること（すなわち特色化とは主に地域性の教育課程化であること）を解説する。したがって、公立学校における特色化とは、通常は、主として、地域住民が恒常的に学校運営及び教育活動に参加することにより、地域の教育資源をいかに学校の教育課程内外に取り込むかを考察し実践することであることを学習する。また、特色ある学校づくりに取り組む私立学校の事例も検討し、公立学校、私立学校、それぞれの先進的事例を学習することを通して、特色ある学校づくりの方法についての理解を目指す。現職教員院生の場合には勤務校での特色づくりを企画し発表する。さらに、小規模特認校制度における特色ある学校づくりについても学習する。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、実務経験者の立場から解説を行なう。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・特色づくりの事例研究を通して、公立小・中学校及び私立学校における特色づくりの可能性と制約について正確に理解することができる。 ・地域の教育資源を掘り起こす視点と、それを学校教育活動に反映させる方法を獲得することができる。 ・小規模特認校制度の教育的意義と課題が認識できる。 ・現職教員院生は、公立小・中学校、私立学校における特色づくりの可能性と制約について正確に認識し、勤務校における特色づくりを企画することができる。
	学級づくり実践演習	<p>学級とは生徒管理のための組織単位であると同時に、学級集団としてコミュニティを形成し自治活動を行う単位でもある。しかしながら、学級に自治活動が定着しにくく、学級が様々な問題行動の温床になっている場合が少なくない。児童生徒一人ひとりが生活主体として自主的な生活態度を獲得し、人間関係を深化させる学級活動を指導する実践力と、その際に必要な教師と学級集団の関係性を構築するコミュニケーション能力の獲得を目指す。取材活動などのフィールドワークとディスカッションなどによって実践的な学習活動を進める。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、フィールドワークを主に担当するとともに、講義全般にわたり実務経験者の立場から適宜コメントを行なう。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・学級における自治活動の内容を理解し、その指導方法を挙げることができる。 ・今日的な学級集団の問題点を理解し、問題解決の方針を述べることができる。 ・児童生徒の主体性を育成する教師の指導方法とその理論を述べることができる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
共通基本科目	第5領域 学校教育と教員の在り方	<p>現代の学校と教育実践</p> <p>急速に変化する現代社会の特色及び教育課題の概要を理解し、とくに学校の社会的役割を検討するとともに、臨床教育、教育方法・学習科学、国際教育といった視点から現代の学校教育の特色や課題を探究する。また、現代の学校の課題を的確に捉え、効果的な教育実践を行うための「理論と実践の往還」の方法について検討する。さらに、附属校や公立の連携協力校の実践を事例とし、実践の特色や課題を捉える方法を理解する。講義の成果として、現代の学校教育の特色を的確に捉えた上で、自らの教育実践を高度なものとする方法を学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代社会の特色を踏まえて、現代的教育課題の概要を理解する。 ・現代の学校や教員の社会的役割について理解する。 ・学校の特色、教育実践の本質を捉え、効果的な実践を行うための「理論と実践」を往還させる方法を理解する。 ・現代の学校と教育実践をめぐる基本的理解をふまえ、連携協力校（実習校）及び現職教員院生は勤務校を事例として取り上げ、学校の特徴や教育実践の課題を分析することができる。 ・現代の学校教育をめぐる課題を踏まえ、その中で、より高度な実践を行うための課題を把握し、討議によって深めることができる。 ・現職教員院生は、これまで勤務した学校の実践を振り返り、その特色や課題についての的確に説明することができる。
		<p>現代の教師と教育実践</p> <p>本授業では、近代日本の公教育における教師像、教育実践のなかに、現代に継承すべきものを探索することにも留意しながら、第一に、主として、現代日本における優れた教師と教育実践を、フィールドワーク・文献研究により把握し、受講生が自己の教育実践体験（現職教員院生）と被教育体験（学部新卒院生）を基盤に、その優れた点と自己の教育実践改革への反映の可能性を考察・発表し、議論することにより、より血肉化していくことを基軸にする。特に、現職教員院生には、自己の教育実践を省察する機会としてもらうとともに、学部新卒院生に対する問題提起の役割を果たしてもらう。第二に、教育を受ける権利の主体者である児童生徒、そして、保護者、児童福祉・矯正教育・司法などの関係機関に働く人たちの教師に対する期待と改善要望を受け止め、それを自己の教育実践の改善（現職教員院生）と目指すべき教育実践（学部新卒院生）に結びつけることを重視する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代日本における優れた教師と教育実践から、その特色を理解する。 ・その特色を単に知識として理解するにとどまらず、自らの教育実践に実際に反映させる方策を明らかにすることができる。 ・児童生徒、保護者、児童福祉・矯正教育・司法などの関係機関に働く人たちの学校教育や教師への期待と改善要望を理解する。 ・学校教育や教師への期待や要望を、自らの教育実践に反映させる方策を明らかにすることができる。 ・自らが目指す教師像・教育実践について明確な目標を持つことができる。 ・現職教員院生は、自己のこれまでの教育実践のありようを省察して、「理想」ではなく「現実」に何を改善するのか、何が改善できるのかを明確にする。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
共通基本科目 第6領域 国際教育（独自領域）	国際教育の理論と方法	<p> 帰国児童生徒や外国人児童生徒の教育、小学校における外国語活動の導入、グローバル人材養成、持続可能な開発のための教育（ESD）の普及など、国際化時代においては、内的、外的な様々な要因の絡み合いによって、新しい教育課題が表出し、国際教育の果たす役割が大きくなっている。本講義では、ユネスコや日本における国際教育の歴史的展開、国際教育の基本的考え方や枠組み、先駆的実践の事例研究等を通して、現代の初等教育、中等教育における国際教育の実践上の課題を探究し、国際教育についての深い理解と実践的指導力の向上を目指す。現職教員院生については、勤務地域の実態や勤務校での実践事例にもとづき、より改善された国際教育のプログラム開発を目指す。 </p> <p> 本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は、講義全体のコーディネートと成績評価及び、理論的解説を行う講義部分を主に担当する。実務家教員は、フィールドワークを主に担当するとともに、講義全般にわたり実務経験者の立場から適宜コメントを行なう。 </p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際教育の歴史的変遷及び基本原理を理解する。 ・国際教育の実践枠組みと特徴を理解することができる。 ・学校教育における国際教育の実践上の課題を理解することができる。 ・自らの視点で国際教育の授業を企画・組織し、実践する力量を獲得することができる。 ・現職教員院生は、勤務校の実態や実践事例に応じた、より高度な授業モデルを開発する力量を獲得することができる。
専門実習科目	教職専門研修1	<p> 教職専門研修では、学習指導、生徒指導、学級指導、課外活動支援などの活動や、学校行事への参加、可能な範囲での校務分掌への関わりなど、現実の学校現場での教員の仕事を全般的な実習を行うことで、教員に求められる総合的な実践的指導力を獲得することを目指す。 </p> <p> 「教職専門研修1」では、自らが実習を行う連携協力校の児童生徒、学習指導、学校運営等の実態を把握し、大学院で履修した共通基本科目等の学習内容を踏まえて、自己の研鑽課題や、二年次の「教職専門研修2」（現職教員院生は、「教職専門研修3」又は「教職専門研修4」）において取り組みたいテーマを明らかにする。 </p> <p> 教職専門研修の履修が一部免除となる現職教員院生を除き、原則として、一年次に、およそ15日間（105時間）の実習を行う。学部新卒院生は、連携協力校で実習を行い、児童生徒への学習指導、生活指導、特別活動などに、T1、またT2として関わりながら、教員としての力量のさらなる高度化を目指す。現職教員院生は、勤務校、または勤務校以外の連携協力校で実施し、自らの実務経験を省察し、実習校での実践自体を客観化させながら、大学院及び実習校での指導教員の指導のもとで取り組む研究課題を明らかにすることを目指す。 </p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らが実習を行う連携協力校の児童生徒、学習指導、学校運営等の実態を的確に把握できる。 ・学校の実態及び大学院で履修した共通基本科目等の学習内容を踏まえて、適切な実習計画を作成することができる。 ・自らの「研修計画」を確実に遂行することができる。 ・およそ15日間（105時間）の実習を通して、自己の研鑽課題や、二年次の実習において取り組みたいテーマを明らかにすることができる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
専門実習科目	教職専門研修 2	<p>教職専門研修では、学習指導、生徒指導、学級指導、課外活動支援などの活動や、学校行事への参加、可能な範囲での校務分掌への関わりなど、現実の学校現場での教員の仕事を全般的な実習を行うことで、教員に求められる総合的な実践的指導力を獲得することを目指す。</p> <p>「教職専門研修 2」では、教員の業務を幅広く実習することを通して、教員に必要な力量を総合的に高めることを目指す。また、「教職専門研修 1」において、自己で定めた実習課題を、「教育実践高度化演習 1」で深めているため、その内容について、実践の中で探究し、課題克服のための実践方法について明らかにしていく。</p> <p>「教職専門研修 2」は、原則として、二年次の学部新卒院生の全員を対象として、連携協力校において、4月上旬から、35日間（245時間）の実習を行う。また、「教職専門研修 1」と同様に、児童生徒への学習指導、生活指導、特別活動などに、T1、またT2として関わりながら、教員としての力量の高度化、実習課題の解明を目指す。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・「教職専門研修 1」において自己で定めた実習課題を、「教育実践高度化演習 1」で深めた上で、連携協力校の実態に即して実施可能な実習計画を作成することができる。 ・連携協力校が抱えている教育課題を踏まえて、自らの教育実践上の課題を解決する方法を研究開発し、実践の場で検証することができる。 ・教職の専門性を高めるとともに、自己省察能力とコミュニケーション能力をより高める。 ・大学院での科目履修において修得した専門知識と、実務的経験での実践とを融合させ、総合的に教育実践力を高めることができる。 ・およそ35日間（245時間）の実習を通して、自らの教育実践上の課題を「教育実践探究論文」において検証する準備ができる。
	教職専門研修 3	<p>教職専門研修では、学習指導、生徒指導、学級指導、課外活動支援などの活動や、学校行事への参加、可能な範囲での校務分掌への関わりなど、現実の学校現場での教員の仕事を全般的な実習を行うことで、教員に求められる総合的な実践的指導力を獲得することを目指す。</p> <p>「教職専門研修 3」は、現職教員院生用の科目として開講するため、勤務校、または勤務校以外の連携協力校で実施する。実習校の研究課題と自己の研究課題を結びつけた高度な研究テーマを設定し、そのテーマについて、140時間の実習を通して探究し、明らかにする。</p> <p>また、「教育実践高度化演習 1」で深めた研究課題に即して、実践の中で探究し、課題克服のための実践方法について明らかにしていく。「教職専門研修 1」（3単位：105時間）を履修した現職教員院生は、「教職専門研修 1」での経験を踏まえて、研究課題を設定する。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・「教育実践高度化演習 1」で深めた課題について、実習校の実態に即して実施可能な「研修計画」を作成することができる。 ・実習校が抱えている教育課題を踏まえて、自らの教育実践上の課題を解決する方法を研究開発し、実践の場で検証することができる。 ・教職の専門性を高めるとともに、自己省察能力とコミュニケーション能力をより高める。 ・大学院での科目履修において修得した専門知識と、実務的経験での実践を融合させ、総合的に教育実践力を高めることができる。 ・140時間の実習を通して、「教職専門研修 4」につなげる、適切なテーマを見出すことができる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
専門実習科目	教職専門研修 4	<p>教職専門研修では、学習指導、生徒指導、学級指導、課外活動支援などの活動や、学校行事への参加、可能な範囲での校務分掌への関わりなど、現実の学校現場での教員の仕事を全般的な研修を行うことで、教員に求められる総合的な実践的指導力を獲得することを目指す。</p> <p>「教職専門研修4」は、現職教員院生用の科目として開講するため、勤務校、または勤務校以外の連携協力校で実施する。実習校の研究課題と自己の研究課題を結びつけた高度な研究テーマを設定し、そのテーマについて、105時間の実習を通して探究し、明らかにしていく。また、「教育実践高度化演習1」で深めた研究課題に即して、実践の中で探究し、課題克服のための実践方法について明らかにしていく。</p> <p>本科目では、自らの研究課題を「教育実践探究論文」としてまとめていくことを念頭に、実習において課題の探究を進めていく。</p> <p>「教職専門研修1」（3単位：105時間）や「教職専門研修3」（4単位：140時間）を履修した現職教員院生は、履修済みの実習における研究課題の推進状況に応じて、研究課題の深まりや進展の程度を勘案して、適切な研究課題を設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「教育実践高度化演習1」で深めた課題について、実習校の実態に即して実施可能な「研修計画」を作成することができる。 ・実習校が抱えている教育課題を踏まえて、自らの教育実践上の課題を解決する方法を研究開発し、実践の場で検証することができる。 ・教職の専門性を高めるとともに、自己省察能力とコミュニケーション能力をより高める。 ・大学院での科目履修において修得した専門知識と、実務的経験での実践を融合させ、総合的に教育実践力を高めることができる。 ・105時間の実習を通して、自らの設定した研究課題を「教育実践探究論文」において検証する準備ができる。
コース科目	教育実践高度化演習 1	<p>「教職専門研修1」の省察を行い、二次の必修科目「教育実践高度化演習2」で作成する「教育実践探究論文」を念頭に、「教職専門研修2」（現職教員院生は、「同3」「同4」）にむけた自らの実践を整理し、実践課題を深める科目として位置づける。「教職専門研修1」の省察（「教職専門研修1」の履修が免除となる現職教員院生は、実務の経験の省察）と教職大学院における学習内容を統合させ、「教職専門研修2」（現職教員院生は、「同3」「同4」）の自らの実習課題及び「研修計画」を設定する。自己の活動内容の省察から見出されたテーマについて、研究者教員からの助言に基づき、探究する。コースや実習校を基礎に、研究者教員ごとにクラス編成を行い、クラスごとの実施を基本とするが、必要に応じて合同クラスで実施する。また、研究者教員が主に担当するが、実務家教員も必要に応じて指導に加わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「教職専門研修1」で実践した内容を的確に振り返り、報告書やレポート等としてまとめ、他者に説明することができる。 ・教職大学院での学びを踏まえて、「教職専門研修2」（現職教員院生は、「同3」「同4」）にむけ、「教職専門研修1」の実習課題を修正し、より改善された「研修計画」を作成することができる。 ・理論と実践の往還を実現するために、実習課題について、適切な理論を用いて検討をすることができる。 ・自らの課題にそって、高度な実践を遂行することができる。 ・実習の反省等を踏まえながら、適切な「教育実践探究論文」の課題設定ができる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目	教育実践高度化演習 2	<p>2年間における教職大学院での学びを総括し、「教職専門研修1」「教職専門研修2」(現職教員院生は、「教職専門研修3」「教職専門研修4」)の省察を行いながら、「教育実践探究論文」作成にむけ、自らの課題を設定する。設定した課題について、「教職専門研修」を踏まえながら、課題解決のために適切な資料等を収集し、それに基づき、実践を分析し、改善する方策を明らかにしていく。自らの課題の改善案の作成においては、受講生が相互に発表や検討を繰り返すことによって、内容を深めていく。最終的には、自らの省察した内容を「教育実践探究論文」としてまとめることを目指す。「教育実践高度化演習1」で編成したクラスを基本に、クラスごとの実施とするが、必要に応じて合同クラスで実施する。また、研究者教員が主に担当するが、実務家教員も必要に応じて指導に加わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「教職専門研修2」(現職教員院生は、「教職専門研修3」「教職専門研修4」)を踏まえて、自らの実習課題及び実習計画を、適切な方法で振り返ることができる。 ・自らの実習を省察し、深め、改善することができる。 ・理論と実践の往還を実現するために、設定した課題について、適切な理論を用いて検討することができる。 ・自らの設定した研究課題について、「教育実践探究論文」としてまとめることができる。
	学校内外の連携による児童生徒支援	<p>学校教育における諸々の問題や課題及び児童生徒の援助ニーズは、社会の変容に伴い多様化し多岐にわたり変化し続けている。このような現況において個々の教師及び学校による支援のみでは自ずと限界があり、教師同士、保護者、地域、専門家、関係機関との連携、協働は必須である。そこで本講義では、学校心理学におけるチーム援助の基本的考え方、枠組みや実践のあり方を中心に検討すると同時にシミュレーション演習によって実践力を高め、連携による児童生徒支援の実践家、コーディネーターとして必要な力量の形成を目指す。現職教員院生は、勤務地域の実態や勤務校での実践事例に基づき、より改善されたチーム援助、学校内外の連携の検討を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校内外の連携の必要性を理解する。 ・心理教育的援助サービスの考え方、枠組みを理解する。 ・コンサルテーション、スーパービジョンの異同を理解し、連携・協働に活かせる実践的力量を獲得する。 ・援助チームのコーディネーターとしての実践的力量を高める。 ・現職教員院生は、勤務校の実態や実践事例を基にしたシミュレーションモデルを開発し、より実践的な力量を獲得する。
	人間理解・対人援助の理論と方法	<p>人間をめぐる問題状況は「個人の病み」と「社会の病み」を交差させる。「個人の病み」にかかわる現場は臨床実践の対象としてたくさんある。心理相談、福祉援助、医療・看護、学校教育、臨床教育等である。社会行動や相互作用の諸過程を分析する人間科学の方法をもとにした対人援助の理論と方法は、逸脱行動への対応や問題解決の臨床実践に「関係性」という射程をもって接近する。児童生徒、保護者、教師等をめぐる教育臨床の課題が多様化・複雑化する現在、このような対人援助の理論と方法を理解しなければ、問題の本質を捉え、適切な支援の方法を見いだすことはできない。本講義では、いじめ、ひきこもり、子ども虐待、ドメスティック・バイオレンス、薬物依存等の多様なアディクション、非行、自殺等を扱いながら、児童生徒をめぐる諸問題を関係性の病理として再構成し、具体的な実践事例を検討しながら、問題の本質を理解するとともに、適切な解決の方法を見いだすことを目指す。なお、現職教員院生は、これまでの経験にもとづく事例の掘り下げの機会として位置づける。</p>

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目 コース共通科目	人間理解・対人援助の理論と方法	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒理解の基礎となる人間理解をめぐる方法を理解することができる。 ・人間科学の方法に基づく対人援助の理論と方法を理解することができる。 ・教育実践の場における人間関係をめぐる諸課題の本質と解決方法を、事例研究を通して理解することができる。 ・教育実践のもつ意義と役割を人間理解という視点から再構成・再把握することができる。 ・現職教員院生は、これまでの経験に基づき、対人援助の文脈で、教育実践や学習支援について自己省察することのできる力を身につけることができる。
	道徳教育の理論と課題	<p>道徳教育は、「道徳の時間」（道徳科）を要として学校教育活動全体で行われるものである。道徳教育の歴史、学習指導要領の変遷、道徳教育の理論について、哲学、心理学、倫理学の視点から考察する。また「道徳の時間」においてどのように授業を展開するのかに加えて、重点目標に基づいた年間指導計画の立て方、別葉作成など、道徳教育推進教師になった場合でも十分対応可能な力を育成する。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の道徳教育の歴史的な背景、ならびに学習指導要領の構造について理解する。 ・道徳の時間の授業を計画し、指導案に基づいて授業をすることができる。 ・学校における道徳教育の位置づけや年間指導計画の立て方について理解する。 ・現職教員院生は、上記に加えて、自らが実践した道徳の指導案などを参考に、その実践をよりよいものに改善し、実践できるようになる。
	小学校英語教育実践研究	<p>本講義では、過渡期にある日本の小学校英語教育分野でよりよい授業を行うために必要となる知識とスキル全般の獲得をねらいとする。そのために、まず子どもの外国語習得のメカニズムを知り、学習指導要領に定められた小学校英語教育のねらいを把握し、小学生にふさわしい授業のあり方をさぐり実習（指導案作成、模擬授業）を行う。小学校英語指導者に必要な英語力の向上も目指す。理論的土台に基づいて現在行われている日本の小学校英語を評価する力を身につけ、改善策（およびそれにリンクした中学校初期の指導）を考える。現職教員院生は、小学校現場における校内研修のあり方についても考え、プランを作成する。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・小学生の外国語習得の特徴とメカニズムについての研究成果をもとに基本的な知識を得る。 ・学習指導要領に定められた小学校外国語活動のねらいと指導法を理解する。 ・先進的な実践例を批判的に評価し、取り入れるべきところを取り入れて指導案が作成できる。 ・小学生の発達段階と状況に応じたベストの英語授業を実施することができる。 ・授業案もしくは実際の授業の報告を行い、相互批評することができる。 ・現職教員院生は、職場での英語指導についての校内研修のあり方を考案できる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目 コース 共通科目	キャリア教育の理論と実践	<p>キャリア教育は、子どもや若者の社会的・職業的自立に向けて、一人ひとりのキャリアを形成するために必要な能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育であり、発達段階に沿った計画的・継続的な学習プログラムを基盤に、個別対応を重視したキャリア・カウンセリングを活用して、体験的活動等を中心としたさまざまな教育活動の中で展開される。本講義では、キャリア教育とキャリア・カウンセリングについて体系的に解説した後、キャリア教育のプログラム開発とキャリア・カウンセリング演習に取り組み、キャリア教育を推進するための実践力を向上させる。現職教員院生は、勤務校での実践事例を基礎にして、より実践的なキャリア教育のプログラム開発に取り組む。</p> <p>・学校教育における生徒指導・教育相談・進路指導に関連させてキャリア教育の位置づけと機能が説明できる。 ・キャリア・ガイダンスおよびキャリア・カウンセリングの歴史と定義を踏まえて現代におけるキャリア教育の意義が説明できる。 ・複数の担当者と役割分担し、互いに協働し合う教育実践のあり方について理解し、その取組の要点が説明できる。 ・キャリア発達を促進するキャリア教育プログラムを提案することができる。 ・キャリア発達を促進するキャリア・カウンセリングのスキルを活用することができる。 ・現職教員院生は、勤務校の実態やこれまでの実践を踏まえて、キャリア教育のプログラム開発能力とキャリア・カウンセリングの活用能力を向上させる。</p>
	学力の理論と評価の実際	<p>近年、知識・技能の習得に止まらず、思考力・判断力・表現力、さらには、対話・協働する力や学び続ける態度の育成までもが、学校に期待されるようになってきている。そうした状況において、学校で育成すべきでかつ育成可能な資質・能力（学力）の中身を明確化し、それを育成する指導と評価のあり方を探っていくことが求められる。本講義では、コンピテンシー・ベースとも呼ばれる近年の教育改革の背景、資質・能力の中身を構造化する枠組み、アクティブ・ラーニングなどの授業改善の視点、そして、パフォーマンス評価などの新しい評価の方法について理解を深めるとともに、それらをふまえた実践を構想する力の育成を目指す。現職教員院生については、勤務地域の実態や勤務校での実践事例にもとづき、より改善された指導案や評価方法の開発を目指す。</p> <p>・資質・能力重視の教育改革の展開とその背景について理解する。 ・学力や資質・能力の中身を構造化する枠組みについて理解する。 ・資質・能力を育成する指導と評価の方法について理解する。 ・自らの視点で資質・能力の育成につながりうる授業と評価を設計し、実践する力量を伸ばす。 ・現職教員院生は、勤務校の実態や実践事例に応じた、より高度な授業と評価を設計する力量を伸ばす。</p>
	外国人児童・生徒支援論	<p>地球規模のグローバル化が進む中で、日本社会では親の移動に伴って来日した外国人児童生徒が増加している。外国人児童生徒の在籍する学校が日本全国に及ぶ中、学校教員にも年少者日本語教育に関わる知識を持つことが求められている。この授業では、外国人児童生徒を対象とした教育の中でも特にことばに焦点を当てる。第二言語の発達や母語保持に関わる基礎理論を学び、教科学習の実践的モデル（教授法）の事例研究の検討を通して、実践者としての力量形成をはかる。さらに、学校における学習支援体制や今日的課題について認識を深める。</p>

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目 コース共通科目	外国人児童・生徒支援論	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人児童生徒の現状を認識し、問題意識を持つことができる。 ・外国人児童生徒のこぼの教育に関わる、基礎理論を理解することができる。 ・外国人児童生徒を対象とした学習支援方法や評価方法について、その特性を理解するとともに、実践への応用を検討することができる。 ・現職教員院生は、地域や勤務校の実態に応じた受け入れ体制や学習支援方法を開発する力を獲得する。
	実践教育特殊講義	<p>教師、学校、授業、児童生徒に関わる最新のトピックを取り上げ、トピックに関する著名な研究者・実践者をゲストスピーカーとして招聘し、テーマに関する内容の基本的事項を理解するとともに、最新の状況に対して、教師には、どのような力が求められているのかを探究する。講義を通して、自らがすぐれた実践者、またはミドルリーダーとして学校現場で活躍するには、どのような資質・能力を高度化する必要があるのかを検討していく。講義は、研究科教員のうち1名が全体をコーディネートする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各トピックに関する基本的事項を理解することができる。 ・自らのこれまでの経験や教師像を省察し、深め、改善することができる。 ・ゲストスピーカーや先輩教員と意見交換することで、自らの問題意識を鮮明にし、自己の学修課題を明確にすることができる。 ・学習したトピックに関する実践をするための力量を高めることができる。 ・現職教員院生は、講演の内容に関する実務の経験を省察し、現在の勤務校で実践可能な方策を明らかにすることができる。
	国語科教育実践研究	<p>現行学習指導要領の国語科「読むこと」領域は、PISA学力調査の影響を強く受けたものである。本講義では、まずPISA調査の求める読む力とはどのようなものなのか、また、認知心理学の研究成果では「読む」という行為をどのようにとらえているのかを明らかにする。さらに、ディベートで「詩」を読む演習を通して、イーザーの受容理論の中心概念である「空所」「否定」がどのようなものであるかを把握する。そして、ディベートで説明文を読む演習と比較することによって、説明文を読むことと文学を読むことはどのような違いがあるのかを明らかにする。このように本講義では、「読むこと」を多面的に考察する。もちろんディベートを用いた読みの指導の方法、実践上の留意点も同時に学ぶことになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育ディベートの実践方法、実践上の留意点などを理解できる。 ・ディベートを讀みの学習指導に用いる際に、適切な論題設定、テキストの選択を行い、学習指導過程のさまざまな位置でディベートを有効に活用できる。 ・読むとはどのような営みなのか、説明文を読むことと文学を読むこととはどのように違うのかを説明できる。 ・現職教員院生は、実践経験を振り返りながら、より高度な教科指導力を獲得する。
	算数・数学科教育実践研究	<p>本講義では、算数・数学科の優れた実践を行うために必要となる、「なされた授業を分析・評価する研究」の基本的方法を理解し、小学校、中学校、高等学校の連携協力校における実践を事例としながら、算数・数学科の授業を改善し、より高度な実践を開発するための力量形成を目指す。アクティブ・ラーニングの導入など、最近の話題の理解や学校種間連携の視点も踏まえながら、授業の分析・評価・改善の過程の理解を通して、自己の授業構成能力、授業実践能力を高めていくことを目指す。</p>

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目 コース共通科目	算数・数学科教育実践研究	<ul style="list-style-type: none"> ・算数・数学科の基本的内容と原理を理解する。 ・算数・数学科をめぐる最新の動向を理解する。 ・算数・数学科の授業を分析、評価、改善するための基本的方法を理解する。 ・実践事例を適切に分析、評価し、改善案を作成することができる。 ・自ら開発した授業モデル案の模擬授業を行い、相互批評することができる。 ・現職教員院生は、勤務地域の実態や勤務校での実践事例にもとづき、より改善された算数・数学授業を開発することができる。
	社会科教育実践研究	<p>本講義では、社会科、地理歴史科、公民科の優れた授業を行うための実践研究を行う。まず、それぞれの教科の基本的内容と原理、方法を理解する。フィールドワークとして小学校、中学校、高等学校の連携協力校を訪問し、そこでの事例をもとに、より高度な教材開発や指導方法、学力、評価等の研究を行う。また、アクティブ・ラーニングや電子黒板、タブレットなどの情報機器、さらには、複数教科で行う合科授業などさまざまな先進的な教育についても開発研究を進める。そして、それらを生かした模擬授業を行い、より専門性の高い社会科教員を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会科、地理歴史科、公民科の基本的内容と原理を理解する。 ・社会科、地理歴史科、公民科をめぐる先進的な動向を理解、実践する。 ・フィールドワークでの提携校での事例を適切に分析、評価し、改善案を作成することができる。 ・自ら開発した教材、授業モデル案の模擬授業を行い、相互批評することができる。 ・現職教員院生は、自らの授業実践を自らが批判的に検証し、従前の授業に固執することなく、より効果的で高度なものに再構築できる。
	英語科教育実践研究	<p>本講義では、学校外国語教育において優れた実践を行うために必要となる、授業分析・評価のための手法、理論的土台を身につけ、小学校、中学校、高等学校の英語授業を改善し、より高度な実践を開発するための力量形成を目指す。英語で教える英語授業と母語を戦略的に適宜活用する方法や教科内容を含めるCLIL型実践への考え方など、最近の話題の理解や学校種間連携の視点も踏まえながら、自己の授業構成能力、授業実践能力を高めていくことを目指す。現職教員院生は、1授業時間の授業力にとどまらず、学年、3ヶ年の見通しの中での授業改善や同僚との授業改善につながる手法を獲得する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語科の基本的内容と原理を理解する。 ・英語科をめぐる最新の動向を理解する。 ・英語科の授業を分析、評価、改善するための基本的方法を理解できる。 ・実践事例を適切に分析、評価し、改善案を作成（実施）することができる。 ・授業改善モデル案もしくは実際の授業の報告を行い、相互批評することができる。 ・現職教員院生は、1授業時間の授業力にとどまらず、学年、3ヶ年の見通しの中での授業改善や同僚との授業改善につながる手法を獲得する。

科目区分		科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース 共通科目	コース 共通科目	理科教育実践研究	<p>本講義では、理科の優れた実践を行うために必要となる、「なされた授業を分析・評価する研究」の基本的方法を理解し、小学校、中学校、高等学校の連携協力校における実践を事例としながら、理科の授業を改善し、より高度な実践を企画・開発・運営するための力量形成を目指す。アクティブ・ラーニングや科学的リテラシー、コンピテンシーの導入など、最近の理科教育の動向や学校種間連携の視点をも踏まえながら、授業の分析・評価・改善を通して、自己の授業構成能力、授業実践能力を高めていくことを目指す。</p> <p>なお、本講義では連携小、中、高等学校での実践を通して、児童生徒の理科の系統的な学びをより実証的に探究、構築させることもねらいとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理科の基本的内容と原理を理解する。 ・理科をめぐる最新の動向を理解する。 ・理科の授業を分析、評価、改善するための基本的方法を理解する。 ・実践事例を適切に分析、評価し、改善案を作成することができる。 ・自ら開発した授業モデル案の模擬授業を行い、相互批評することができる。 ・現職教員院生は、勤務校の実態や実践事例に応じた、より高度な授業モデルやモデルを活性化させる「実験」を開発する力量を獲得する。
		保健体育科教育実践研究	<p>本講義では、保健体育科の優れた実践を行うために必要となる、「なされた授業を分析・評価する研究」の基本的方法を理解し、小学校、中学校、高等学校の連携協力校における実践を事例としながら、保健体育科の授業を改善し、より高度な実践を開発することができる力量形成を目指す。アクティブ・ラーニングの導入など、最近の話題の理解や学校種間連携の視点も踏まえながら、授業の分析・評価・改善の過程の理解を通して、自己の授業構成能力、授業実践能力を高めていくことを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健体育科の基本的内容と原理を理解する。 ・保健体育科をめぐる最新の動向を理解する。 ・保健体育科の授業を分析、評価、改善するための基本的方法を理解する。 ・実践事例を適切に分析、評価し、改善案を作成することができる。 ・自ら開発した授業モデル案の模擬授業を行い、相互批評することができる。 ・各授業でのテーマに関して、多様な情報を収集し、多角的に理解することができる。 ・現職教員院生は、自分の現職経験を踏まえて、各到達目標について、一層深い理解をすることができる。
コース 必修科目	臨床教育 コース科目	学校におけるメンタルヘルスの理論と実際	<p>本授業では、学校における児童生徒、さらには教師のメンタルヘルスについて、心身の発達について考慮しつつ、ストレスや不適応の理論等から理解するとともに、それらを学校現場での応用に結びつけて検討していく。また、児童生徒や教師のアンダー・マネジメント、ネット環境におけるストレス、発達障害のある児童生徒のストレス、災害とストレスなど、学校現場で必要になってくると思われるメンタルヘルス上の諸問題について実践的に検討したい。現職教員院生については、これまでにかかわってきた児童生徒の事例について、本授業で言及された諸理論に基づいて解釈するようにしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校におけるメンタルヘルスの諸問題について、本授業で言及された諸理論に基づいて説明できる。 ・学校でのメンタルヘルスにかかわる諸問題について、その援助策を提案できる。 ・現職教員院生は、これまでにかかわってきた児童生徒の事例について、本授業で言及された諸理論に基づいて解釈できる。

科目区分		科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目	臨床教育コース科目	学校教育相談・学校カウンセリングの理論と方法	<p>本授業では、初めに学校教育相談における予防的・開発的・課題解決的教育相談に関して、様々なカウンセリングの理論と技法への理解を深めていく。次に、日常的に教師が行う学校教育相談場面における問題行動、学習、心理・社会、進路、健康等にかかわる事象への支援の実際について、事例等を通して検討していく。その際に、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携、チーム支援のあり方についても検討を加え、教師に求められる学校教育相談活動について、カウンセリングの技法やチーム援助の実際など体験的に学びながら理論と実践力を高めていく。</p> <p>・学校教育相談・学校カウンセリングの基本概念や理論について理解を深めることができる。 ・カウンセリングの理論と技法を学び、自己・他者理解及びネットワーク支援について理解を深めることができる。 ・現職教員院生は、日常の教育現場において、学校教育相談活動を展開していくための理論と実践力を高めていく。</p>
		問題行動とその対応	<p>学校生活において個別の課題を抱えている児童生徒は少なくない。それらが顕在化したときに「問題行動」となり対応が始まる。その際、単に「問題行動」の沈静化ではなく、個別の課題克服に向けた対応が重要である。具体的には、そのケースを見立て、教師と児童生徒の関係を基に対応していくことになる。本科目では事例検討やフィールドワークを通して、「問題行動」対応に求められる総合的な教師の実践力を理解し、獲得を目指す。受講生の問題意識、指導経験を交流しながら、より実践的な学びを行う。現職教員院生は、課題解決のために応用できる実践力やチーム支援等をコーディネートする力の獲得を目指す。</p> <p>・ケースに応じて、「問題行動」に隠された児童生徒の抱える個別の課題を挙げることができる。 ・「問題行動」に対応するための、指導方針と具体的な対応策を立案し提起することができる。 ・校内のチーム支援を構成する方針と具体的な対応策を立案し提起することができる。 ・児童生徒および保護者支援のための課題を理解し、学校の外に開かれたチーム支援を構成する方針と具体的な対応策を立案し提起することができる。 ・現職教員院生は、連携協力校や現任校において自己課題・学校課題を明確化し、課題解決のために応用できる実践力の獲得を目指す。 ・現職教員院生は、チーム支援等をコーディネートし、支援するコミュニケーション力の獲得を目指す。</p>
		ピア・サポートによる生徒支援の実際と課題	<p>本授業では、予防的・開発的生徒指導であるピア・サポートの基本理念や背景の理解を深め、教育現場においてピア・サポートプログラムを展開できる実践力を育てる。さらに、学校現場でピア・サポートの理念を活かした協同的な職場環境の形成に貢献する教員の資質や力量を高める。</p> <p>さらに、「どのように学ぶか」について着目し、課題の発見と解決に向けて主体的・協同的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）によって本授業を展開し、学校現場でアクティブ・ラーニングの視点をういた教育活動を推進できる実践力を高める。現職教員院生は、協同的な職場環境の形成に貢献できる資質の向上を目指す。</p> <p>・ピア・サポートプログラムの基本理念や背景の理解を深めることができる。 ・演習等、体験的な学びを通してピア・サポートプログラムを指導展開できる実践力を高める。 ・アクティブ・ラーニングの視点から教育活動の改善に取り組むことができる。 ・現職教員院生は、協同的な職場環境の形成に貢献できる資質を高める。</p>

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目 コース必修科目 教育方法・学習科学 コース科目	学習意欲の理論と実際	<p>本授業では、学校における児童生徒の学びにかかわる様々な要素の中でも、とくに学習意欲に着目し、学校現場での実践に結びつけて検討していく。はじめに、児童生徒の学習意欲の諸理論を紹介し、それに基づいて実践的事例を検討する。その後、学習意欲を阻害するものについて考えてゆく。さらに、それを踏まえて、児童生徒の学習意欲を高めるための方策について、学習活動において困難のある児童生徒への支援策も含めて、ワーク等も実施しつつ考えてゆく。現職教員院生は、これまで経験してきた事例について、本授業で言及される諸理論により意義づけや省察をすることとしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲のメカニズムについて、本授業で言及された諸理論に基づき、具体例をあげて説明できる。 ・学校で生じる教授・学習上の諸問題について、学習意欲の観点から援助策を提案できる。 ・現職教員院生は、これまで経験してきた事例について、本授業で言及される諸理論により意義づけや省察ができる。
	授業におけるICT活用	<p>情報機器の急速な発展によって、従来の視聴覚教育から、タブレットや電子黒板を活用した教育としての授業実践へと、授業を取り巻く情報環境は大きく変化してきた。そこで本講義では、これからの時代を見越して、各教科の授業実践を高度化するためには、どのようにICTを活用することができるのか、学習者にとって効果的な利用の方法は何か等について探究する。講義を踏まえて、受講生が選択した学校種・教科において、具体的なICT活用による授業モデルを開発し、相互批評によって、よりよい授業モデルへと改善し、ICTを活用した授業実践能力を高めていくことを目指す。現職教員院生については、ICT活用とネットワーク環境との関係性をも視野に入れ、より高度な授業モデルを開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT及びICT教育の基本的事項を理解する。 ・ICT教育の特質と限界について理解する。 ・ICTを活用した優れた授業実践を分析し、ICTを用いることにより、どのような効果が生じているのか理解することができる。 ・関連する実践事例を適切に分析、評価し、改善案を作成することができる。 ・自ら開発した授業モデル案の模擬授業を行い、相互批評することができる。 ・現職教員院生は、ICT活用とネットワーク環境との関係性をも視野に入れた、より高度な授業モデルを開発する力量を獲得する。
	新しい教育内容の実践と課題	<p>新しい教育内容を扱う諸教育の中で、主に「国際理解教育」「シティズンシップ教育」「キャリア教育」「環境教育」を取り上げ、それらの基本的な考え方や教材化の視点を概説するとともに、これらの領域に積極的に取り組んでいる学校でのフィールドワークを行う。フィールドワークの結果を踏まえた事例研究を行い、当該教育を実践する際の諸課題を吟味するとともに、その改善案を検討していく。最後に、これらを授業化し、適切な実践をするための基本的課題や指導者に求められる力量等についての総括討議を行い、講義全体で得た知見に基づき、実際に授業実践案を構想する。現職教員院生は、さらに地域や学校の実態に応じた、新しい教育内容の教材開発、授業開発を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい教育内容について、その基本的な考え方を理解できる。 ・児童生徒や学校・地域の実態に応じて、適切な教材や学習方法を選択し、当該領域の授業を企画・組織し、展開していく力量を身に付ける。 ・現職教員院生は、勤務地域の実態や勤務校での実践に基づき、新しい教育内容の教材開発、授業づくりができる。

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目	教育方法・学習科学コース科目	<p>共通基本科目やコース科目で学修したカリキュラムの開発や編成、教科指導に関する理論や基本的スキルを基盤とし、授業実践力高度化のために学校現場で広く実践されている教員による校内の「授業研究(会)」の意義と方法を体験的に学び、同僚性の中で互いの職能を向上させる能力を身につけることを目標としている。実際の学習指導案や授業を素材に、指導案や授業を分析・評価を行うことで、授業における中心課題を明らかにし、授業改善の具体的方法を提案できることを目指している。</p> <p>フィールドワークを実施する。学習指導案を事前に検討し、授業観察の観点を各自が明確にもった上で授業参観を行い、参観後は授業者を交えて学習指導案の内容や参観した授業についての質疑応答を行う。それらをもとに、本授業の中で授業研究会を開催する。</p> <p>本授業は15回の授業を研究者教員と実務家教員のTTで実施する。研究者教員は授業研究に関わる理論的枠組みの設定や分析の視点等を講義・演習で担当し、実務家教員は授業実践事例の分析や評価、授業実践力向上を目指す活動を中心に担当する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業力を高めるために授業研究と授業研究会が果たす意義と役割について理解する。 ・授業研究の基礎となる学習理論の変遷とそれぞれの理論の特性について理解する。 ・学習指導案の分析・評価の方法や授業観察の観点の設定や授業分析・評価のあり方について理解する。 ・実際の授業について、学習指導案の分析、授業の評価、授業改善の提案を行うことができる。 ・現職教員院生は、これまでの授業研究の在り方を振り返り、自校での授業研究をよりよいものに改善することができる。
	国際教育コース科目	<p>世界の子どもと教育支援</p> <p>本講義では、特にアジア地域における教育支援に焦点を当て、グローバル化の進む中でのような状況に開発途上国の子どもたちが置かれているのか、その子どもたちに対する教育支援のあり方について考察する。また、世界各国で行われている教育支援のシステムを知り、教育支援プロジェクトがどのように作成、実施されているかについて知る。世界の子どもたちの現状を知ることによって、日本の子どもたちを取り巻く教育問題を改めて認識し、地球市民としての視点を持った教師を育てる。なお、教育支援についての理解を深めるために、国際理解教育におけるワークショップ教材を多数利用する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開発途上国における子どもの貧困について理解する。 ・JICAやNGO等によるさまざまな教育支援の方法について理解する。 ・開発途上国における教育支援プロジェクト案を作成することができる。 ・現職教員院生は、講義で学習した内容を勤務校で実践可能な授業案として再構成することができる。
	国際教育コース科目	<p>グローバル・シティズンシップ教育の構想と課題</p> <p>ユネスコが「持続可能な開発のための教育(ESD)」に取り組み、一定の普及をみる中で、最近では、Global Citizenship Education(GCE)の必要性が提起されている。本講義では、知識基盤社会の中でも着目されている「グローバル・シティズンシップ教育」について、その基本的考え方や実践のあり方について検討していく。「シティズンシップ教育」の歴史的展開、日本及び諸外国の実践事例の検討なども含めて、ポストESDの時代における「グローバル・シティズンシップ教育」のあり方について多角的に検討し、受講生が、自らがその実践者となるべく、必要な力量の形成を目指す。</p>

科目区分	科目名称	(各科目上段) 科目概要 (各科目下段) 到達目標
コース科目 コース必修科目 国際教育コース科目	グローバル・シティズンシップ教育の構想と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・シティズンシップ教育の歴史の変遷を理解する。 ・国際教育（国際理解教育）及び「持続可能な開発のための教育（ESD）」の基本原則を理解する。 ・「グローバル・シティズンシップ教育」の実践枠組みと特徴を理解する。 ・学校教育における実践を分析し、改善策を検討することができる。 ・自らの視点でESD及び「グローバル・シティズンシップ教育」の実践案を開発することができる。 ・現職教員院生は、勤務校の実態に即した学校全体の教育計画を構想することができる。
	国際交流プログラムデザインの理論と方法	<p>社会の急速なグローバル化に伴い、小中高のあらゆる段階において教育の国際化は重要な課題となっている。本授業では、国際化において重要な役割を果たす国際交流プログラム（海外研修、留学生受入、学校間交流、地域の多文化体験など、多様な形態を想定）の開発・運営・評価を効果的に行うための力量形成を目指す。プログラム開発においては、文化的多様性の受容と自文化中心主義の克服を長期的目標とおきつつ、異文化間教育学や学習心理学の理論及び異文化コミュニケーション・トレーニングの手法を参照しながら、事例分析（現職教員院生については勤務校での事例）とプログラム開発のグループ・ワークを通じて、実践力を養うことを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際交流プログラムの開発・運営・評価の一連の流れと理論的枠組みを理解し、実践できる。 ・異文化体験を通じた学びと成長に関する諸理論を理解し、実践への応用を考察できる。 ・各種国際交流プログラムについて、児童生徒の学びと成長を促す仕組みという視点から分析・評価できる。 ・現職教員院生は、勤務校における実践事例を適切に評価し、改善への提案ができる。
	IB教育の理論と実践	<p>グローバル化の進む現代社会において、国際バカロレア（IB）教育が注目されている。文部科学省は、グローバル人材育成、カリキュラム改善、人材流動性の向上といった点からIBに着目し、高等学校におけるIB教育の導入や、大学におけるIB受験を促進している。本講義では、IBの歴史、理念、教育内容、教育方法について概観する。また、立命館宇治高等学校においてフィールドワークを行い、IBの教育の参与観察や授業担当者との議論を行う。そして、IB教育への理解を深め、日本の教育への活用について考えていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・IB教育の歴史と理念を理解できる。 ・IB教育の教育内容や教育方法を理解できる。 ・IB教育の実践から、その特徴や課題を理解できる。 ・IB教育を日本の学校に導入する際のメリットや留意点について、自分なりの考えを表明できる。 ・現職教員院生は、IBの理念に沿った授業設計をし、それを実践することができる。